責任

ラバウルの将軍今村均

責任ラバウルの将軍今村均

角田房子

新潮社版

責任（せきにん） ラバウルの将軍（しょうぐん）今村均（いまむらひとし）

一九八四年五月二〇日　発行
一九八四年七月二〇日　六刷

著　者　角田房子（つのだふさこ）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03―二六六―五一一一
（編集部）03―二六六―五四一一
振替東京四―八〇八
印刷　錦明印刷株式会社
製本　大口製本株式会社
定価　一五〇〇円

©Fusako Tsunoda, 1984
Printed in Japan

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-325805-5 C0023

責任　ラバウルの将軍今村均＊目次

ラバウル戦犯収容所　7
今村大将、自決をはかる　7　迷える小羊のために　27
戦犯の慈父　41　キリスト教徒片山海軍大尉　58
さらばラバウルよ　72　今村大将の〝責任裁判〟　75
島民虐殺事件　90　安達第十八軍司令官の自決　99
処刑前夜は満月だった　109
太平洋戦争勃発まで　120
均少年と角兵衛獅子　120　結婚　131
満州事変から二・二六事件へ　142　関東軍参謀副長以後　163
第五師団長——南寧の激戦　180

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

太平洋戦争開戦　195

ジャワ攻略戦――重油の海の立ち泳ぎ　195
全蘭印軍無条件降伏　213　ラバウルへ　228
ガダルカナルの責任者は誰か　235　現地自活計画　253
海の輸送路を断たれる　267　草むす地下要塞　275
ズンゲン守備隊玉砕の真相　288　戦い終る　303

ジャワ裁判始まる　320

獄中の「八重汐」大合唱　320　裁判に立ち向かう気魄　334
キリストと親鸞　344　マヌス島からの便り　351
自ら志願してマヌスの獄へ　358

晩年 371
帰国、出獄、そして自己幽閉 371
舞中将の述懐 397
あとがき 410

装画 渡辺章人
〔ラバウルの独立有線九十一中隊、のち第六遊撃隊に所属した〕

責任

ラバウルの将軍今村均

ラバウル戦犯収容所

今村大将、自決をはかる

敗戦の翌年、昭和二十一年七月二十七日午前三時すぎ、すでに四時に近いころであったろうか――ニューブリテン島ラバウルの戦犯収容所で眠っていた桜井克巳（現・奈良市在住）は、突然強く肩をゆすられて目をさました。

「おいっ！　今村閣下のお姿が見えん」

貨物廠の主計中尉であった貴谷がのしかかるように顔を近づけ、耳許に口をよせていった。桜井は反射的に上半身を起し、彼の位置からは三番目の隅の寝床を見た。人の姿はない。

「便所へ行かれたのではないか」

「いや、便所ではない。行って見てきた」

桜井は胸騒ぎを押えて、貴谷と共にそそくさと土間におりた。中央通路の土間の両側には、それぞれ数十人の戦犯たちが横一列に頭を並べて寝ていた。屋内三ヵ所の電灯は夜中も消されることはなく、四囲は壁のかわりに目の荒い金網張りなので、外塀にとりつけられた照明灯の強い光も、夜気と共に流れこんでいた。

「今村大将の寝場所は北の一番端でした」と桜井克巳は語る。「その隣りが貴谷中尉、次が渡辺少佐で、それから私の順でした。私たちに続いて皆が外へ出てきて、あちこち手わけして大将を

捜しました。誰もが、大将は自決されたのでは……と思い、あわてふためいていました」

オーストラリア（豪）軍ラバウル戦犯収容所は、一般にコンパウンドと呼ばれていた。ラバウル湾を目の下にのぞむ高台の平坦地約二百メートル平方の敷地で、四隅には機関銃二挺を備えた見張りやぐらがそびえていた。周囲を囲い、また内部を三つに区分する有刺鉄線には五メートルおきに高さ三メートルの太い柱が立ち、夜間はすべての柱に煌々と照明灯が輝く。これが故障すると、たちまち外周の鉄条網に沿って照明をつけたジープやトラックが並び、警備の現地（パプア・ニューギニア）兵は裏山に向けて三十発装填の自動小銃を一気に射ちこみ、その戦場さながらの音響で、逃亡の意思など持ってはいない戦犯たちをおびやかした。

戦犯が起居する建物は一棟が七十人から九十人を収容する広さで、白っぽいトタン屋根の細長い九棟が整然と並んでいた。これらの施設のすべてが――ジャングルでの原木の切り出し、その運搬、製材、宿舎の建設、有刺鉄線張り、付近の道路、また見張りやぐらの機関銃据付けまでも――戦犯たちの労働力によってなされたものである。これらが完成したのは昭和二十一年六、七月ごろで、戦犯たちはその年の初めから、それまでの天幕やルーフィングの仮収容所から順次こちらへ移っていた。

敷地内には芝が植えこまれ、各棟の周囲には花壇もあって、環境は決して悪くない。戦争終結時、第八方面軍司令官であった陸軍大将今村均（ひとし）の手記には次のように書かれている。

「……こうするまでの六ヵ月間の作業で、教養の少ない二、三の豪軍職員のそそのかしによる〝ハリアップ〟とか〝カムオン〟とかの罵声と共に下る黒人兵の暴虐の鞭（むち）は、大いに日本人の血を沸かしめたものである」

桜井克巳は《大将はすでに死んでおられるのでは……》という思いに胸をしめつけられながら、懸命に今村の姿を捜し続けた。桜井は二十五歳の中尉であった。《今ここで大将を失ったら、お

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れたち戦犯はどうなるのか……みなが閣下一人を頼りにしているのに》

無駄と知りながら別棟になっている便所を何度ものぞき、その隣りのめったに水の出ないシャワー室にはいり、雨水を貯える軒下のドラム缶の間をさぐり……、絶えず体を動かしているのだが、彼らが自由に行動できる範囲はおのずから限られている。居ても立ってもいられない不安に胸をかきむしられながら、同じ場所をただウロウロと動くばかりである。

「見つかったぞォ」という叫びが作業道具を入れる小屋のあたりからあがるまでに、どれほどの時間がたっていたのか――いま桜井は記憶していない。誰が今村を発見したのか、誰が豪軍へ知らせに走ったのか――それも彼は知らない。

「私は道具小屋へは行きませんでしたから……。大将の傷は浅いから大丈夫だと聞いて、ほっとして自分の宿舎へ帰りました」

控え目な性格らしい桜井は、人々を押し分けて今村の様子を知ろうという気を起さなかったのであろう。あるいは、敬慕する今村の血まみれであろう姿を目撃するにしのびなかったのかもしれない。

桜井が自分の寝床に帰ったとき、周囲にはまだ誰もいなかった。《本当にお命に別条はないのだろうか》と案じながら、彼は今村の寝床に目を向けた。昼間の暑さからは想像できないほど気温の下る夜のために、一人に三枚ずつ毛布が与えられていたが、その一枚が少し乱れて、はねのけられていた。病院へ運ばれるであろう今村が、今ここへ帰ってくるはずもないのだが、桜井は身を乗り出して、丁寧にその毛布の乱れを直した。

その時である。桜井は敷きぶとん代りの毛布の枕許に、きちんと畳んで置かれている白い紙を見つけた。遺書――と、とっさに彼はさとった。

開いてみると、果して今村の筆蹟であった。《豪軍はこの遺書を没収するのではないだろうか。きっと、そうだ》

桜井はためらわず自分のノートをとり出し、急いで遺書を書き写した。

「遺書は美濃半紙だったでしょうか……とにかく和紙でした。鉛筆で書かれていたか、毛筆だったか、おぼえていませんが……」

今村の自決未遂事件が起ったこの日も、戦犯たちは早朝から使役にかり出された。夕方、桜井が宿舎に帰ったとき、今村の遺書はすでになかった。彼の予測通り豪軍が没収したのか、単にとりまぎれてなくなったのか、いっさい不明である。しかしその内容は、今も桜井の手許に保存されている写しで知ることができる。

「　光部隊将兵御中　　今村均

台兵各位御中

小生は祖国を今日の有様に導きし敗戦の最重大の責任者として終戦の際自決して君国に謝罪致すべき処、十万部下の帰還等の処理の為この機を延引し、今日と雖も尚光部隊将兵及台兵諸子の為つくすべき責務の残されたるもの有之候えども、突然に他方面に運ばるる公算多きに至り、遂に当方面に眠る幾万英霊と会する機をも失う虞多分なるにより、各位に対しては申訳之なきも、今日決行致し候。

各位はこの上とも忍辱修練を重ね祖国復興参加の日を、台兵諸君は台湾振興就業の日を待たれたく、くれぐれも団結と統制とを保ち、健全の生存を確保せられんこと切望の至りに候。

世を異にはいたし候も、幽冥の界より常に諸子を護らんことを御誓申上候」

〝光部隊〟とは、今村が戦犯容疑者の集団につけた名称である。今村は彼らを「我国の光栄ある犠牲者」と呼んで、この名を選んだ。戦後のラバウルには戦犯のほかに、法務関係の旧軍人などで組織された弁護団と法廷での証言者が残っていた。いま彼らに当時の今村を語ってもらうと、

まず戦犯全員に対する全く平等な態度が挙げられる。今村は陸海軍の間にも、将官と一兵との間にも何の差別もつけず、台湾出身者をも含めて、すべて〝私の大事な旧部下〟として対した。特に、戦争中は最前線への輸送などに身命を賭して働いた台湾出身者の将来について、今村がどれほど責任を感じ心を悩ましていたかが、この短い遺書からも察しられる。

桜井克巳の戦犯容疑は、ラバウル軍事裁判の過半数を占める「インド兵虐待」であったが、結局裁判なしで不起訴となり、昭和二十一年末に帰国した。このとき彼は厳重な所持品検査の目をくぐって、今村の遺書の写しを持ち帰った。その後長く、遺書について人に語ることもなかった桜井が、これをラバウル会事業部代表の山田六郎（現・東京都在住）に見せたのは、昭和四十三年の今村の死からさらに数年の後であった。山田は私にそれを語り、桜井の住所を教えてくれた。

「ラバウルの戦犯時代を思い浮かべると、悪夢としかいいようがありません」と、桜井は私に語った。「インド兵虐待のほとんどが〝事実無根〟か〝針小棒大〟なのですが、こちらの言い分は通らず、多くの人が死刑になりました。ですから身に覚えがないからといって、安心してはいられなかったのです。判決を受けた者は今村閣下の前に立ち、挙手の礼で『陸軍中尉〇〇は、本日の豪軍裁判に於て死刑を宣告されました。ここに謹んで申告いたします』と述べるのです。閣下も挙手の礼でこれを受けられました。無言で……。どんなに、つらいお気持であったか……」

私が桜井に会ったのは昭和五十七年六月中旬の曇天の昼さがり、奈良ホテル別館十一階の食堂であった。窓ガラス越しに見える興福寺の塔は、優しい姿を薄紫のモヤに包まれて宙に浮いていた。このしっとりとした古都のたたずまいに溶けこんだ姿で、桜井は低い声で語り続けてゆく。戦犯容疑者として日夜死の恐怖にさいなまれた若い日の彼が、今の静かな初老の姿にたどりつくまでの三十七年という歳月を、私は胸の中でたぐりよせながら敗戦直後のラバウルを思い描いた。

今村の副官薄平八郎大尉（現・東京都在住）が〝大将自決〟を知って豪軍との連絡所へ駆けつけると、今村は机の上に寝かされていた。容態を気づかう薄はまっすぐ今村のそばへ近づこうとしたが、彼の前に大柄な豪軍将校が立ちはだかった。

「なぜだ？　なぜジェネラルはこんなことをした？」

豪軍将校は激しい怒りをかくそうともせず、薄を睨みすえてたたみかけてくる。

薄平八郎はアメリカ生まれの二世である。十三歳のとき父の故郷福岡に帰り、一年間を日本語の猛勉強に費して修猷館（中学）に入学、卒業後陸軍士官学校に進んだ。

昭和二十年八月、第十七師団歩兵第五十四連隊の通信隊長としてラバウルで敗戦を迎えた薄は、その二日後、それまで顔を見たこともない今村の前に呼び出された。英語力を生かして、副官として勤務するように――といわれた薄は、余りの思いがけなさに思わず次の質問が口をついて出た。

「私が英語を話すことを、閣下はどうしてご存じでありますか」

「わしは何でも知っておるよ」

身内の若者をからかうような笑顔を向けられて固苦しさは一度にとり払われ、薄も持ち前の少年のような明るい微笑を浮かべた。これが今村の死に至るまでの二十数年間続く、伯父と甥のような関係の起点であった。

今村の手記にはしばしば〝性格の純な人〟という言葉が出てくるが、これは彼の好きな誠実、率直な人物への最上の讃辞であるらしい。今村はどの時代にも若者をかわいがったが、敗戦後のラバウルで特に好意を抱いた薄や片山日出雄なども〝性格の純な人〟であった。戦犯収容所にいる前の今村は、副官として夜もそばに寝ている薄によく昔話をしたが、このアメリカ生まれの将校は同じ話を初めてのような顔で聞く芸さえ持ち合わせていなかった。「その話はもう聞きました」という薄に今村は微笑を向け、「ほう、そうだったか」と目を細めて何度もうなずいたと

いう。

「大将の自決は、私にとっても実に意外でした」と薄は、九段・靖国神社大鳥居脇のマンションの客間で語る。

「終戦直後は、私も今村さんが自決されるのではないかと思っていました。だが手許のピストル……イタリア製の小型拳銃ベレッタも〝恩賜の軍刀〟もさっさと豪軍に引渡してしまわれたので、それ以来、自決はなさらないと思いこんでいたのです。〝自決〟という知らせを受けて、私はただもう今村さんの容態が心配で駆けつけたのに、豪軍の将校が私をつかまえて離してくれない。彼は大将の傷がどの程度かということより、なぜこんな迷惑なことをしたのかとカンカンに怒っていて、WHY? WHY? と私を問いつめるばかり……」

敗戦の責任をとったのだと思う——という薄の答は、いっそう相手を怒らせた。

「責任? 何をいうか。戦争はもう一年も前に終ったではないか。ジェネラル・イマムラはベストを尽して、このラバウルを守りぬいた。可能性の限度を越えるほど立派に守った後に、自殺しなければならないどんな責任があるというのか。我々は敬意をもってジェネラルに接し大切に扱ってきたのに、なぜこんなバカなことを……」

薄はなおも〝日本武将の責任〟について説明した。だが言葉を尽せば尽すほど豪軍将校の不可解の度は増すばかりであった。

「〝責任〟に対する考え方が、まるで違うのですよ」と、いま薄は語る。

豪軍将校と薄との〝責任問答〟が白熱化している間に、今村は救急車で豪軍病院へ運ばれていった。ここで今村と日本側との接触は断たれた。当時ラバウルにいた人々の記憶も薄れかけた今、退院の日付や「今村大将自決調査委員会」の調査内容などを知るには、のちに刑死した片山日出雄海軍大尉の獄中日記に頼るほかない。

片山の日記は、彼が戦犯容疑者として巣鴨拘置所へ送られた昭和二十一年二月九日から、銃殺

刑によりラバウルで二十九年の生涯を閉じる二十二年十月二十三日まで、克明に書かれている。彼の起訴理由は、昭和十九年日本軍に撃墜された豪軍ハドソン機の搭乗員スコット少佐以下四名が、非武装の住民を攻撃した疑いで銃殺された事件の責任を問われたものである。事件当時の片山は、アンボンの根拠地隊司令部に勤務していた。

片山が巣鴨を経てラバウル戦犯収容所にはいったのは昭和二十一年五月初め、今村自決の約三ヵ月前である。長身の美青年であった片山は敬虔なクリスチャンで、最後まで同胞戦犯に神の教えを説き、周囲の人々の減刑運動に寝食を忘れて尽した。

今村は片山日出雄について「生父の家は出雲の大社千家氏。幼にして片山家に養子にやられ……」と詳しく書き残している。片山は東京外国語学校英語貿易科を卒業したのち海軍に召集されたが、中学時代に洗礼を受けて深い信仰を持ち、将来は教会で奉仕生活にはいるつもりであったという。養祖父が後援していた舞踊家石井漠、小浪兄妹と親しく、在京中は小浪の家に寄宿していた。

片山は結婚後まだ一年にも満たない新妻ゆりを残して、巣鴨拘置所に入れられた。彼は第一夜の日記に「ゆりを思い涙を流せり」と書いている。その後の日記に〝ゆりちゃんの踊りのポートレイト〟と書かれているから、彼女は石井漠か小浪の門下生ではなかったろうか。

今村が自決をはかった七月二十七日の片山の日記には「……大将は連絡所テントの机の上に横臥され、丁度救急車に移される処でした。まだ意識はありました」とある。豪軍将校に呼び出された片山が連絡所に着いたのは、薄より少し後であったらしい。この場で片山は、アブソン収容所長あての今村の遺書の翻訳を命じられた。この遺書はおそらく今村が身につけていたものであろうが、その内容は記されていない。

七月二十九日の片山日記に「今村大将、本日退院」と書かれているから、今村は僅か二夜を病院で過したにすぎない。彼は致死量の二倍と信じる毒薬を飲んだが、嘔吐して目的を果せず、さ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com